

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2019 年度
氏名	尾田 歩美	指導教員 (主査)	杉本 希映

論文題目	<b>青年期の SNS を介した対人関係が友人との親密度に与える影響 —孤独感と社交不安に着目して—</b>
------	--

### 本文概要

【問題と目的】近年、インターネット上に社会的ネットワークを構築するサービスである Social Networking Service (以下、SNS とする) が若者の間で普及しており、コミュニケーションツールとして利用されている。しかし青年期の SNS を介したコミュニケーションが、友人との親密度にどのような影響を与えるかという研究は未だ十分になされていない。先行研究にて、現実において対人関係を発展させることが難しい孤独感や社交不安の高い者ほど、現実での対人関係を補償するためにオンラインコミュニケーションを利用すると考えられている (Poley & Luo, 2012) ことから、インターネット利用は孤独感や社交不安を抱く者のコミュニケーションツールとして利用されやすいということが考えられる。さらに過去のメディア研究を踏まえ、Valkenburg & Peter (2007) はオンラインコミュニケーションに対する有用性の認識が友人との親密度にもたらす影響について明らかにした。したがって SNS 利用による孤独感や社交不安が友人との親密度に与える影響は、SNS 上でのコミュニケーションに対する有用性の認識により異なってくるのではないかと考えられる。そこで本研究では、青年期の孤独感と社交不安が、SNS 利用量および SNS 上でのコミュニケーションに対する有用性の認識を介して友人との親密度に与える影響について、仮説モデルを作成し検討する。

【方法】大学生 191 名に質問紙調査を実施し、有効回答数は 162 名であった。①性別・年齢・SNS 使用の有無②SNS の使用時間、使用頻度③孤独感：改訂版 UCLA 孤独感尺度 (工藤・西川, 1983) ④社交不安：SAS-A 日本語版 (岡島他, 2009) ⑤SNS 上におけるコミュニケーションの有用性の認識：SNS 上でのコミュニケーションの関わりの幅尺度 (Valkenburg & Peter, 2007 を翻訳) ⑥SNS 上におけるコミュニケーションの有用性の認識：SNS 上でのコミュニケーションの関わりの深さ尺度 (Valkenburg & Peter, 2007 を翻訳) ⑦友人との親密度：親密性尺度 (谷・原田, 2011) を用いた。

【結果と考察】SNS 上でのコミュニケーションの関わりの幅尺度、および関わりの深さ尺度について探索的因子分析を行ったところ、ともに 1 因子構造であり、十分な内的整合性を有していることが確認された。次にピアソンの相関係数を算出した結果、SNS 使用量と関わりの幅・SNS 使用量と関わりの深さ・関わりの深さと社交不安との間に弱い正の相関が、SNS 使用量と孤独感・社交不安と親密度との間に弱い負の相関が、関わりの幅と深さ・孤独感と社交不安との間に中程度の正の相関が、孤独感と親密度との間に強い負の相関がみられた。最後に仮説モデルを作成し共分散構造分析を実施した結果、孤独感が高まると SNS 使用量は減少し、さらに孤独感の高さは SNS 上でのコミュニケーションの幅・深さの両方に影響しないことが明らかとなった。また、社交不安が高まると SNS 使用量が増加し、かつ SNS 上でのコミュニケーションに対する有用性の認識も高められた。SNS 使用量、および SNS に対する有用性の認識は、友人との親密性に影響を与えないことが明らかとなった。本研究にて、孤独感が高い者にとって、SNS 利用は孤独感の解消や親密な友人関係の形成に繋がらず、有用性も感じられないものであることが示唆された。そのため、孤独感への介入方法については今後詳細な検討が必要であると考えられる。また、社交不安が高い者は積極的に SNS を使用しており、SNS 利用が有用であると感じているものの、実際の友人関係における親密度は促進されないことが明らかとなった。したがって、社交不安が高い者に対しては、SNS を利用しつつも現実での対面場面につなげていくような支援が必要であると考えられる。